

会報八月号 動かない

目次

- ・ 動かない
- ・ 止する
- ・ 定まる
- ・ 動く
- ・ 変わる
- ・ 造化(道)に徹する

● 動かない

ある席でのこと。来賓の中の一組の夫婦の雰囲気、他の人達と随分違うことに気が付いた。座っているだけなのに、その座り姿が他と全く違う。まるで泰山のように微動だにしないのだ。まさに、論語の「温にして厲し。威ありて猛からず。恭にして安れかし」という印象である。

「動かない」というのは、力無く立ち尽くしている、枯れている、死んでいるというのではない。生命力が迸り出る直前の含蓄的状态であり、躍動の瞬間の緊迫状態。ライフルで撃つ直前の狙いを定めて静止している瞬間。引き絞った弓が指から離れる刹那、瞬間の静止した状態…こういった状態である。

● 止する

「四書」の一つである「大学」に、「大学の道は、明德を明らかにするにあり、民に親しむにあり、至善に止するにあり。止することを知りてしかる後定まるあり。定まってしかる後よく静かなり。静かにしてしかる後よく安んず。安んじてしかる後よく慮る。慮ってしかる後よく得…」とある。「明德を明らかにする」というのは知である。「民に親しむ」というのは仁である。そして「至善に止する」というのは、情欲の奴隷とならず道義の主体として在るといふ勇である。己の知・仁、そして勇の徳を発揮して、至善に心を止める。そうすることで、なすべきことが明確になって心身が定まる。定まっているからこそ静かであることができ、安んずることができ、成すべき物事をよく慮ることができ、その結果、よく道理を会得し、よく為すべきを成し、造化を体現させる。

至善に止まって動かないというのは、成すべきを為して自己を実現し、自他の共栄を図っていくための根源的な立ち位置であり力なのである。動かない土台があるからこそ、その上で自在に動くことができる。至善に止まって動かないというのは、動くための力の源泉を掴んでいるということである。信念・信義・信仰・造化・道理・仁義・愛……。人により至善の認識や自覚の度合いが違うのは当然である。

だが思うに、至善の理解がどうであっても、その奥の奥へと深めていけば、造化の根源の含蓄的エネルギー（万物を生成化育させる生命力）に心を拠せるという所へ行くのではないか。

造化とは、宇宙（全き一）が、様々に自己を実現しようとする限りない努力である。私たちひとりひとは、「造化」の一つの結果であり、宇宙（全き一）の一部である。造化は百三十七億年かけて、造化を認識して自覚できる「心」を持った私たち人間を生み出した。人間は、自覚する造化（万物を生成化育させるはたらき）主体である。造化の道理に順って己の造化を体現していくことが、人としての命である。

閑話休題。自在に動こうとすればするほど、却って、止まるべき所から動かないことが大切である。人が作った「物」でもそうだ。例えば、扇子。扇子は広げて扇いで使う（勿論歴史的に、メモ、器、見立て道具等の使い方もされてきた）ものである。そして、扇子を扇子として使えるのは、扇骨（親骨・中骨）を束ねた根元に要（かなめ）という動かない所があるからである。

●定まる

「止まるべき至善」という根源・源泉。この源泉は「造化」のはたらきとなって、様々に自己を実現しようとする努力を止めない。そのはたらきは、欲望や志の満足を目指して、自らの意志を形にしようとする。「何がしたいのか。何を為すべきか」が明確になると、心はそこに定まる。

心が定まれば、浮ついたり騒がしかったりということはない。静かで落ち着いていられる。静かな落ち着きがあることで、安らかでいられる。安らかであることで、様々に慮ることができ、より深く道理を会得し、その道理に順って造化を様々に体現していくことができる、と「大学」は説く。

定まるというのは、理想や志が定まることでもあるし、今為すべきことが定まることでもある。それは、心が至善に止まっているからである。

●動く

人は大自然の一部であり、大自然は地球の一部であり、地球は宇宙の一部である。ということは、人は宇宙の一部、宇宙を構成する部分であり、その意味では、人は宇宙である。そして、宇宙は造化の陰陽相対（待）性の原理、秩序、時間によって造化を様々に形にしてきた。このはたらき（万物生成化育）を宇宙の意志であり誠であり道であるとすれば、人間の道もそれと同じである。なぜなら人は宇宙の一部だからで

ある。

根本にあるのは、造化の「はたらき」である。それと同調すれば、人も造化に徹する。造化（万物の生成化育）という宇宙の意志を人間の目を通してみれば、「様々に自己を実現しようとする無限の努力」である。これが「中庸」にいう「誠は天の道なり」である。そこに続く「これを誠にするは人の道なり」というのは、私たち人間が宇宙の一部である自覚を持って、己を造化に徹して本然の人間として生きること。換言すれば、自分の存在意義（止する）と理想（定める）を見失うことなく、信念を持って自分が掲げた理想を追及していく姿勢が、「これを誠にすることである」。

心が至善に止し、そして理想や目標が定まれば、暑い寒いはもちろん、心を浮つかせるような物事は些細なことである。些末なことに囚われてフラフラしたり騒いだりする必要はない。「士は弘毅でなければならぬ」「衣食住に拘るだけの男は道を語るに値しない」と説く論語の心も同じだ。己を造化に徹する自覚が大切である。感情や私欲の波に流されそうなきは、アンカーを下ろして流されないように努める。アンカーを下ろした底にあるのは造化の根源である本然の生命力、至善である。風や波（情・欲）に溺れそうな時は、ここに拠りながら、行き先（目標・志・理想）を定め、風と波を活かして進んでいくのだ。

●変わる

人は変われる。心の中のもう一人の自分が、「変わりたい、変わらなければ」と本気で思った時、一つのきっかけがあれば人は変われる。数分前の自分では考えられないような行動を起こせる。人との出会いで、人間はいつでも変わることができる。

また、人は感激し、感動する生き物である。感動とは「感じて動く」と書くように、人は何かに感じて自ら動く。知って動く（知動）わけではない。どうしても変われないというのは、変化に怯えているだけなのかもしれない。が、この点こそ学問の要諦だ。自分を変えられなければ、学問に大した意義はない。造化に徹するとは、変化に徹することである。自分が自覚する造化主体であるとの認識が深まってくれば、変化に怯える心を打破する勇気が出てくる。確かに、人は臆病な一面も自分勝手な一面も持っている。しかし、弱い人間が、自らの意志で生まれ変わろうとするなら、それは素晴らしいことだ。

●造化（道）に徹する

冒頭の夫婦は、心が至善に拠り、そして理想が定まっているから動かない。造化（道）に徹しているから動かない。ふたりの「温にして厲し」は、造化に徹した人間の厳肅さの現れである。「威ありて猛からず」の緊迫感、引き絞った弓そのものである。そして「恭にして安れかし」は、そんな夫婦にどうしても惹かれてしまう私たちの心地良さである。

今月も健康と健闘を。



【引き絞った弓】

性命力/造化力の充満
緊迫



【志】

方向性が定まり、心を浮つかせない



【中心/根源から動く】

綿飴の成長



【崩れない姿勢】

土台/体幹が強靱



<動かない>
=陰陽一体

→枯死ではなく、性命力/造化力の充満状態



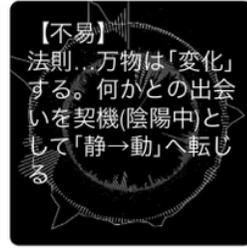
【明明徳/親民/止至善】

止→定→静→安→慮る→得



【無心】

躊躇わない
迷わない
誠



【不易】

法則...万物は「変化」する。何かとの出会いを契機(陰陽中)として「静→動」へ転じる



【静 不動=動】

→次の瞬間「動」に変われる「不動」であること

宇宙の一部「分」
→他者との調和
→道理に順ずる

使命/志/目標/欲望
→「士は以て弘毅ならざる可からず」
→自己表現/和親共栄
=社会/人類/宇宙の進運を亮ける

尚武
→邪悪に対しては、武を以て実力行使する

人間として生きる
→情欲の奴隷ではなく、道義(造化)の主体として生きる

造化の核(無限のエネルギーの含蓄)
→心を止める場所
=誠/明/健
👉心は、地位/金等の外物や稚心に止めるものではない

人格的創造活動
→「天行健 君子以自彊不息」

原理原則
・陰陽相対(待)性の原理
・陰陽中の哲学に順ずる

造化
→自己を実現させようとする無限の努力

万物の生成化育
→進歩・発展
→潜蔵・統一
→秩序・体系